

Vent

音楽教育 ヴァン

vol. 51

巻頭インタビュー

春風亭昇太 落語とは、座布団1枚の上の演劇

レポート

令和4年度

全日本音楽教育研究会全国大会

山口大会(総合大会)

第53回 中国・四国音楽教育研究大会 山口大会

参考楽譜

器楽合奏

『鍵盤ハーモニカで吹こう 歌おう 合奏しよう
すてきなメロディーひろがるよ』

(作詞・作曲：千田鉄男)



風に寄せて

新しい年を迎えます。

2023年は卯年。うさぎの長い耳は、まるでアンテナのようにかすかな物音も聞き取り、草むらで生活する彼らの身を守っているといいます。

先日、久しぶりにコンサートホールに足を運びました。楽器の音や歌声はもちろんですが、演奏者が舞台上を歩く靴音、会場の静かなざわめき、近くに座る人がプログラムをめくる音…そんなちょっとした音になぜかあたたかみを感じ、そういう音に触れることの貴重さに気づきました。

私たちは耳を傾けるとき、おそらく感覚を総動員して音の先にあるものを身体中で探し求めるのでしょう。なにげない雑音からも、そこに人がいるという安心感、感動の時間を共に過ごす喜びを感じ取れるのだと思うのです。

真剣に何かを聞こうとする子どもたちのまなざしに出会うとき、その心のアンテナに触れる音や言葉から広がる世界には、常に明るさと喜びが満ちあふれることを願ってやみません。

教育芸術社 代表取締役社長 市川かおり

Contents

- 3 | 巻頭インタビュー
春風亭昇太 (落語家)
- 9 | 授業者に訊く (特別事例編)
松浦光男・鈴木祥隆 (岐阜大学)
- 14 | レポート
令和4年度全日本音楽教育研究会全国大会
山口大会 (総合大会)
第53回 中国・四国音楽教育研究大会 山口大会
- 20 | Kyogei Presents
音楽診断
[第16回] 日本の作曲家編 (監修・解説: 山田治生)
- 22 | Information
- 24 | 参考楽譜
器奏合奏
『鍵盤ハーモニカで吹こう 歌おう 合奏しよう
すてきなメロディーひろがるよ』 (作詞・作曲: 千田鉄男)
- 30 | エッセイ
新・音から広がる世界 [第11回] 藤原道山

shota shuhpatei

巻頭インタビュー

落語とは、座布団1枚の上の演劇

落語家

春風亭昇太

聞き手

池田雅明

今号の巻頭は、落語家の春風亭昇太さんのインタビュー記事です。舞台やテレビなど、幅広く活躍されている昇太さんは、トロンボーンも演奏されます。聞き手は、昇太さんにトロンボーンを教えていらっしゃる池田雅明さんです。お2人に音楽と落語について、さまざまに語っていただきました。





● 春風亭昇太(しゅんぷうてい・しょうた)

落語家。新作落語の創作活動に加え、昇太独自の解釈で古典落語に取り組み、文化庁芸術祭大賞を受賞するなど、新作、古典問わず高い評価を得ている実力派真打。さらに、演劇への出演も多く役者としても活躍し、ミュージシャンとのライブも意欲的に行うなど、ジャンルを越えて積極的に活動している。また長年にわたる「お城めぐり」が高じ、著書の発行、城郭フォーラムのパネラー、講演、城イベントの出演も多い。落語芸術協会会長、日本演芸家連合理事。

「古典をやる」とは、基礎を学び、
そこで自分の立ち位置が分かったら、
自由な方向にもっていくということですよ。

トロンボーンのおもしろさ

池田：昇太師匠は落語家ですが、トロンボーンも吹かれています。その経緯についてお聞かせいただけますか？

春風亭昇太：『笑点』で共演している三遊亭小遊三師匠が音楽好きで、見た目がきれいだからといってトランペットを買ったんです。でも練習しているうちに、金管楽器は1人で吹いていてもつまらないということに気が付いたようで。そのため、楽器を弾けそうな身近な人をピックアップした中に僕も入っていて、「君はトロンボーンね」と言われたのが始まりです。僕の師匠の春風亭柳昇りゅうしょうがトロンボーンを吹いていたからだそうですが。僕はやりたいたんて言っていないのに(笑)。しょうがないから楽器を買って、吹き始めました。

池田：なぜ柳昇師匠はトロンボーンを吹かれていたのですか？

昇太：僕の師匠は戦争前に働いていた会社で、ブラスバンド部にいたんですよ。戦争で指をけがしたことからは元の仕事に戻ることは難しく、落語家になったんです。柳昇師匠はそのまますとトロンボーンを吹いていて、仕事にも生かしていました。

池田：まさに受け継がれている感じですね。逆に言うと、小遊三師匠のおかげで受け継いだということですね。

昇太：最初は無茶振りだなあって思ったけれど、今になってみれば、ありがたかったな、と。柳昇師匠が亡くなったあと、ご遺族から師匠のトロンボーンをいただきました。

池田：そうだったのですか。小遊三師匠と昇太師匠はディキシーバンドをされていますが、どうしてディキシーなのですか？

昇太：楽器の弾ける人を集めてみて、編成を見たらたまたま

ディキシーランド・ジャズの編成だったんです。好きで始めたわけではなくて(笑)。

池田：てっきりディキシーがお好きなのかと思いました。

昇太：ディキシーって知っている曲が多く、スタンダードのあるジャンルですから、吹いていて楽しいし、お客さんも楽しそうにしてくれます。だから、いいジャンルを選んだなとは思いますがね。

池田：ディキシーはジャズの創成期の音楽で、楽譜を読めなかった人たちによってつくり上げられました。いい意味で演奏する人も聴く人も気楽であることが魅力です。ですから、昇太師匠たちの雰囲気合っているジャンルだったのではないのでしょうか。僕が昇太師匠にトロンボーンのレッスンをするきっかけとなったのは、三宅裕司さんでしたよね。

昇太：そうですね。毎年、新橋演舞場で三宅裕司さん主催のお芝居をやっていますが、昭和のジャズマンを演じる劇中で1曲吹くことになり、これまでのように適当に吹くわけにもいなくて、各パートで先生

をつけてもらったんですよ。

池田：三宅裕司さんが、10年ぐらい前に初めてつくったビッグバンド「ライト・ジョーク・ジャズ・オーケストラ」の初代トロンボーンが僕なんです。そういう経緯もあって僕にお声が掛かったのですが、もう恐れ多くて「ええ!? 昇太師匠に!」と驚きました。

昇太：教わって初めて、僕が今まで吹いていたポジションが間違っていたことに気が付いて(笑)。4のポジションが違ってたまま、何年間もやっていたという。

池田：ポジションが間違っているでも音を出せるのがトロンボーンです(笑)。師匠が感じるトロンボーンの魅力は何ですか？

昇太：曖昧なポジションの音が出せることでしょうか。バルブの楽器はドはド、ソはソなんですけれど、トロンボーンはその間の音も、「うによーん」って出せちゃう。これがやっぱりいちばんおもしろいんですよ。だから僕も間違えたとき



には、「にゅーん」って動かすようにして。すると何かこう、ちゃんと吹いているみたいな感じがするんです(笑)。

池田：そうなんです。私もよくごまかします。まあジャズだからですけどね(笑)。

昇太：あははは(笑)。

池田：トロンボーンを始められる前、他に音楽の経験はありましたか？

昇太：中学校のとき、ブラスバンド部でユーフォニアムを吹いていました。ユーフォニアムとトロンボーンは、マウスピースが同じですよ。

池田：そうです。ですから、意外とトロンボーンにスイッチする人がいるんです。僕もブラスバンド部でユーフォニアムを担当していました。

昇太：ユーフォニアムっていい楽器ですよ。大好きです。

座布団1枚の上の演劇

池田：次に、落語について伺いたいと思います。同じ「笑い」という共通点をもつ、お笑い芸人と落語家には、どのような違いがあるのでしょうか？

昇太：基本的に違いはないと思いますが、活躍の方向でしょうか。お笑い芸人さんはテレビに出て活躍する。落語はテレビ向きではないんですね。落語家になる人は、語り芸をやりたい人たちなので、テレビに出たいとは思っていません。僕たちは笑いを担当してはいますが、基本的にはストーリーテラーなんです。一人一人が劇団みたいなものなんですね。演出も主演も1人でできる。

池田：完全な一人芝居で全てを構築していくという感じでしょうか。これは他になかなか類を見ないことですよ。

昇太：そうですね。世界中にもさまざまな演劇が存在して、一人舞台はあります。でもそれは相手のせりふを自分でしゃべるんですよ。例えば、相手に「愚かだ」と言われたという設定なら、「何っ！お前は私のことを愚かだというのか」というように。でも、落語は別の人や相手を、自分が演じるわけです。このスタイルは日本にしかない。

池田：なるほど。

昇太：日本人って、省略が得意な民族です。俳句とか短歌という、短詩系の文学があるでしょ。あれって、ほんとうに言いたいことがあるなら言えばいいじゃないですか、言葉をたくさん使って。でも、日本人は五七五の中にそれをよみ込んで「想像して！」「行

間読んでよ！」というんです。

池田：そうですね(笑)。

昇太：そんなわけで、日本人は何でも小さくするのが得意だから、演劇も小さくしたんです。省略して省略して省略したら、世界で最も省スペースな座布団1枚の上のできる演劇をつくり出した。発見しちゃったんだ。

池田：落語と演劇の違いは、どのような点でしょうか？

昇太：まず演劇は100%その役になろうとするわけです。王様なら王様、町娘なら町娘。それに対して、落語はいつもそこに自分が残っている。何%かはその落語家が残っている状態で演じるんですよ。その何%を残すのかは、その人のさじかげんです。僕なんてほぼ春風亭昇太なだけ(笑)。落語ってすごい微妙なところにある、不思議な芸能なんですよ。

古典落語と新作落語

池田：最近、落語の世界に飛び込んでくる方は多いのですか？

昇太：すごいです。僕が入門した頃に比べ、落語家の人数は倍になりました。僕が入ったときはね、400~500人でしたけれど、今は千に届かんとしていますから。もうね、急に伸びました。

ジャズとの共通点でもありませんね。
いろいろなプレイヤーや先生がいて、
まずは自分のジャズの基礎を
確立してから個性を探すという。



● 池田雅明(いけだ・まさあき)

トロンボーン奏者・作曲家。日本大学芸術学部卒業後に単身渡米。パークリー音楽院コマースリアルアレンジ科専攻、トロンボーンをPhil Wilson、Hal Crookに師事。NYマンハッタン音楽院でSteve Turreに師事。8年に及ぶ滞米中にGeorge Russellのビッグバンドや、Frankie Ruiz、Joe Bataanなど数々のNYサルサバンドにて米国内外でツアーを行う。帰国後はアレンジャーとして、TV、CM、映画などの音楽を手掛ける一方、ジャズトロンボニストとして、多岐にわたって活動中。近年は、諸外国からのトロンボニストとの共演、通訳、サポートも務める。現在昭和音楽大学准教授。

池田：へえー！なぜなのでしょう？

昇太：落語ってね、古典芸能なので、これまでとっつきにくいと思われていたんですね。落語を紹介する人たちも割に難しく紹介していたし。でも世代が変わり、落語を紹介してくれる人も若い方になりました。すると、エンターテインメントの一つだということが一般的に伝わったのでしょうか。金額も抑えて設定しているの、その気軽さも理解してもらえるようになり、お客さんは増えましたね。

池田：今の落語業界は、新作落語でもお客さんはしっかりついてきていますよね。ジャズの世界では、お客さんも古典から抜け出せなくて、新しいものが受け入れられない状況が続いています。

昇太：ちょっと前は落語も違ったんですよ。僕も、新作落語をやり始めた若い頃は、「ちゃんと落語やってよ」とお客さんに言われましたからね。「新作なんか落語じゃない」という時代があったんです。だけど、ずっとやっているうちに受け入れられるようになって、今は古典も新作もお客さんは区別しなくなりました。

池田：やり続けたことに意義がある。新しい開拓ですね。

昇太：でも僕1人で成し遂げたわけじゃなく、やっぱり新作落語をやっている人たちがずっといたからこそ、長い歴史を経てここまで来たんです。僕たちはやりやすい時代になりました。

池田：何度も師匠の寄席を拝見していますが、若いお客さんが多いですね。師匠は古典も大切にされていますが、古典をやる意義を教えていただけますか？

昇太：落語で「古典をやる」とは、基礎を学び、そこでの自分の立ち位置が分かったら、自由な方向にもっていくということです。自由にやるためには、基本的なことが大切なですよ。

池田：具体的にはどのようなことをするのですか？

昇太：いろいろな方に稽古をしてもらい、それぞれの落語をまずコピーするんです。完全にしゃべりをコピーした中から、自分のしゃべりのスタイルを探することを落語家はやっています。

池田：そこがジャズとの共通点でもありますね。いろいろなプレーヤーや先生がいて、まずは自分のジャズの基礎を確立してから個性を探すという。お弟子さんや若い人には、どのようなことを伝えていますか？

昇太：必ず「まずは教わった師匠の落語をコピーしなさい」と伝えています。それがいちばんだから。「こんなふうにししゃべったほうがいいよ」というアドバイスはしません。なぜなら、落語家によって、容姿も体の大きさも、声も違うじゃないですか。僕らは見た目の印象も大事ですから、僕がしゃべっていることをそのまま教えても、その人に合わないんです。だから「いろいろな人をコピーしてから自分のスタイルをつ

くりなさい」と言うわけです。

池田：若手の中で、新作落語に興味をもつ人はいますか？

昇太：もちろんいます。書く作業は若いうちから始めたほうがいいんです。創作と語りはまた別物なので。若いうちになるべく書いたほうが良いと言っています。

池田：若手の方が書いた新作は、添削してあげるのですか？

昇太：添削はあまりしないです。落語の場合は、その人がおもしろいと思ったことが、いちばんおもしろいんですよ。僕がしゃべっておもしろい言葉と、別の人がしゃべっておもしろい言葉って違うんですよ。ただし、全体の骨格や、「今の時代にこういったネタは怒られるよ」ということは教えます。

1人で舞台に立つこと

池田：落語はお1人で舞台に立ちますが、その緊張感とどのように向き合っていますか？僕たちはまだステージ上に仲間がいますけれど、お1人だったら緊張しそうです。

昇太：1人だから逆に、間違えても迷惑かけないんです。なんとかできちゃう(笑)。まあ、基本は慣れですよ。でも緊張しなくなったらおしまいですから。必要なのは、ある程度の緊張と、それから慣れと自信。あとは、ちょっといい気になることも大切です。いい気になりすぎると鼻持ちならない存在になるのですが(笑)。でも、おどおどしている人の芸なんか見たくないもんね。

池田：緊張するのは失敗を恐れているからだと思うんです。落語で言うと、やっぱりウケなかったとき。そんなときはどう克服するのですか？

昇太：自分の中で、失敗したなとか、うまくいかなかったなとか感じて、舞台上で首をかしげたりうなだれたりしちゃいけませんよね。それはお客さんに対して失礼です。お客さんの前では「うまくいきました」という顔をして、とりあえず降りてくると。それから、反省はそのあと自分ですればいいだけの話だなと思っています。

池田：高座に行くときのルーティーンはありますか？

昇太：落語は1人なので、僕がいちばん偉いんだと思って上がっています。

池田：おまじない的なもの？

昇太：そうです。でも落語をやっているとね、ときどき何もかもうまくいって、神様みたいな気持ちになることがあるんだよね。まるで指揮者みたいに、「はい笑って、笑って。ここはちょっと抑えて。はい、ここで笑って！」ってできることが年に何回か……いや年に1回、ううん2年、いや4年に1回ぐらいあるんですよ(笑)。すると終わったあとポーツとしちゃって、脳が清浄化されたようになる。



落語は常に変化しています。
変化しないと落語じゃないと
思うんですよね。

池田：プレーヤーがお客さんの指揮をとるという感覚はおもしろいですね。

昇太：でも、自分でいちばんよかったと記憶している舞台の水準があるじゃないですか。これを経験しちゃうと、それ以下はだめなんですよね。ここを超えないといけないから、場数を踏めば踏むほど、気持ちよくなる回数って少なくなるんです。だからたぶん、真面目すぎる人はアーティストに向いていないと思う。つらくなってくるんだよね。だから、ちょっといい加減な人、ちょっと責任感がない人ぐらいがちょうどいい。まあ結局は好きな落語をやって、拍手をもらいたいわけですから、そのために努力するんです。

『笑点』はガラパゴス諸島

池田：ここで、少し学校に関する話題に移ります。

昇太：今、日本で最も大変な仕事でしょう、学校の先生って。

池田：そう思います。先生方が授業を行う中で、おもしろいことを言う先生っていらっしゃいますよね。そういった、おもしろいことを言うコツを教えてくださいませんか？

昇太：おもしろいことっていうのはね、共感してもらって初めてそれがおもしろいことになる。自分がおもしろいことと、聞いている人がおもしろいこととはちょっと別物なんですよね。だから、最初からウケると思ってしゃべらないことです。しゃべってみた結果、「あ、ウケたな」ぐらいがちょうどいいんだと思う。

池田：じゃあ、狙いすぎるのはよくない？

昇太：そう、聞いている人は「狙ってるな」っていうのが分かるから、自然に言うの。それで、ウケたらオッケー！ウケなかったらそこは流す！

池田：(笑)それから、子どもたちの教育に関わることでですが、「笑い」と「ふざける」こととの違いは何だと思えますか？

昇太：簡単です。周り用なのか、自分用なのかということ。目の前の多くの人たちを楽ませるのが「笑い」。「ふざける」のは自分だけが楽しいことです。

池田：はっきりとした線引きがあるのですよね。話は変わりますが、今、中学校で使用されている教育芸術社の教科書『中

学生の器楽』には、昇太師匠が司会を務めているテレビ番組『笑点』のテーマ音楽も入っているんですよ。

昇太：すごいですね。いい会社ですね(笑)。

池田：『笑点』は、僕たちが子どもの頃から親しみのある番組ですが、番組に対する使命感は感じていますか？

昇太：僕が子どもの頃からもやっていた番組ですからね。まさかそこに自分が出るとは思っていませんでした。大喜利とは、もともと昔からあった落語の余興の一つなんです。お客さん呼びたいときに、サービスで行うようなものです。それがテレビ番組になったわけですね。落語そのものではないけれど、落語色の強いもの。『笑点』を見ておもしろいなと思った人が、落語も聞いてみようかなという気持ちになってくれたらうれしく思いますね。

池田：『笑点』は、昔から番組のスタイルをあまり変えていないのですか？

昇太：変えてないですね。『笑点』ってね、たぶん進化しなかったからよかったんだよね。他の番組はみんな進化したんですよ。でも、『笑点』だけがいつさの進化を止めたまま、ずっと同じことをやっていた。そしたら、ガラパゴス諸島みたいになっていたんです。

池田：今も変わらず人気があって続いていますからね。

昇太：そう、気が付いたら不思議な生き物が住んでいた、みたいに(笑)。お正月以外で、テレビに着物を着ている人が出る番組なんかないでしょ？しかも、おじいさんしか出ない。気が付いたら特殊なものになっていたんだよね。



取材は春風亭昇太さんのスタジオで行われた

池田：番組が続いている理由は、昇太師匠なりに何だと思えますか？

昇太：視聴率がいいからでしょうか(笑)。あとは、今はコロナでできませんが、通常のバラエティーのスタジオ収録と違って、公開収録で一般のお客さんたちに聞いてもらっているからでしょうか。過度な演出もなく、お客さんたちは無理に笑ったり拍手したりしないので、自然に見てもらえるんじゃないかなと思いますね。

画面で見えるものはカタログ

池田：昇太師匠は落語家として、どのようなことを意識されていますか？

昇太：プロの落語家は、落語が完成したと思っただめだということです。それは落語の歴史を見れば一目瞭然で、落語は常に変化しています。変化しないと落語じゃないと思うんですね。だから絶対に「落語はこういうものである」「これが落語の到達点だ」と考えてはいけません。

池田：昇太師匠は公益社団法人 落語芸術協会の会長にも就任されていますよね。落語界を牽引するお立場にあることについて、どのようにお考えですか？

昇太：ここでの僕の仕事は、落語芸術協会の噺家さんたちが、円滑に仕事をできるようにすることです。落語界の進む方向は、僕じゃあ変えられないし、変えようともしていません。落語は、“伝統芸”だけど“伝承芸”ではないんです。落語はいつも変化していて、その結果、社会に順応する場合もあるし、しない場合もある。個々でやっているのがおもしろいので、一つの方向に進めようとは思っていません。好きなことができるような空気づくりも含めて、制度を整備しています。事務的なことも多いです。

池田：落語家さんたちのサポートをされているのですね。最後の質問になりますが、昇太師匠が落語家を目指したきっかけは何だったのでしょうか？

昇太：僕は落語のデビューが遅くてね。子どもの頃、落語はあまり好きじゃなかったんですよ。なんだかもう、じいさんが黒い着物を着て、座布団に座って、念仏みたいのを唱え

てるなって、ずっと思っていて。でも大学の落語研究部に入って初めて落語を生で聞いたら、すごーいおもしろくて。えー！って腰を抜かしましたね。田舎にいて知らなかったんですよ。東京に出てきて、生で見たらおもしろいものがいっぱいあるんだなと思いました。つまらないと思っていた落語がこれだけおもしろいなら、他にもおもしろいものがあるかもしれないと思って、それから音楽のライブやスポーツなどを生で見に行くようになったんだよね。そうしたら音楽なんて、まるで違う。

池田：落語も音楽も、生で見ると全然違いますよね。僕も今ジャズの世界にいますが、子どもの頃は全く見向きもしませんでした。大学で初めてジャズを生で聴いて、その自由度と古典の技術に衝撃を受けてから、ジャズの世界に触れました。

昇太：そうなんです。音楽を生で聴いたときの臨場感と迫力。耳というか、頭に入ってくる音の量が違うんです。テレビやスマートフォン、パソコンで見ているものって、あくまでカタログですよ。だからそのカタログで気になるものがあつたら、ぜひ一度生で見たほうがいいと思います。いつでも好きなジャンルの音楽を聴くことができる。こんな時代って今までなかったんですよ。若い人には、いろいろな音楽を聴いて、好きなジャンルはもちろん、好きではないジャンルも見てほしいと思います。

池田：それは芸能や外の風景など、いろいろなことに対して言えますね。

昇太：そうそう。画面上でどんなにきれいでも、生にはかなわないからね。雪の風景だって、コタツの中で見てもだめだと思ふもん。

池田：温度とか匂いとか、全てがありますからね。

昇太：若い頃に「好きじゃない」と思い込んでいることは、全てが正解じゃありません。だからなるべく若いうちに、いろいろなものを見聞きしておいたほうがいいですよ！ということです。

出演情報

日本テレビ
『笑点』大喜利6代目司会
(毎週日曜日)

ニッポン放送
『高田文夫のラジオビバリー昼ズ』
(毎週水曜日)

USEN
『昭和ちゃんねる』

NHK総合
『あなたが主役50ボイス』

NHKラジオ第一
『春風亭昇太のレコード道楽』



授業者に訊く

特別事例編

岐阜大学教育学部

授業者：松浦光男（まつうら・みつお）

東京藝術大学音楽学部器楽科を経て、同大学院音楽研究科音楽教育修了。これまで、オーケストラに在籍し数多くの演奏活動を行った。またスタジオミュージシャンとして数多くの録音に参加している。東京藝術大学 教育研究助手・学術研究員を経て、現在、岐阜大学教育学部准教授。管楽器早期教育、音楽科授業における器楽合奏などの研究を行っている。

授業者：鈴木祥隆（すずき・よしとか）

岐阜大学教育学部、筑波大学大学院人間総合科学研究科 障害科学専攻 博士前期課程修了。発達支援センター、看護専門学校、早稲田大学人間科学部eスクール教育コースを経て、現在、岐阜大学教育学部 特別支援教育講座助教。聴覚障害児の教育に関する研究や海外の特別支援教育、教員養成に関する研究などを行っている。

聞き手：Vent編集部

特別講義の位置付け

新型コロナウイルス感染症拡大時における歌唱、吹奏楽器の制限を背景に、国際的、特別支援教育的視点をもった教員の養成を目指すため、学習指導要領に示されている「諸外国の音楽」について取り上げるとともに、アングルンを用いた教育、障害理解について教科等横断型の授業を提案する。講義では、インドネシア教育文化省、西バンドン市及び駐日インドネシア大使館の協力を得て、インドネシアよりアルディアン・スマルワン先生、アンディカ・ヒクマレタ先生を講師にお迎えし、アングルンについて理解を深める。

※取材は感染症対策を講じたうえで、2022（令和4）年10月に行われたものです。
顔写真撮影時のみ、マスクを外しています。



松浦光男先生と鈴木祥隆先生

今回の「授業者に訊く」は、特別事例編として、岐阜大学教育学部よりインドネシアの伝統楽器アングルンの活用事例をご紹介します。2022年6月に音楽教育講座2年生及び特別支援教育講座の学生を対象に開催された〈「器楽合奏I」特別講義 インドネシアの伝統楽器 アングルンを奏でる〉をもとに、松浦先生、鈴木先生が音楽教育と特別支援教育それぞれの立場から考えるアングルンの魅力や活用法について、お話を伺いました。

特別講義の流れ

		講義内容
導入		○ 講師、インドネシアとアングルンの紹介
展開	前半	○ アングルンを演奏する Step1 1人1台アングルンに触れる Step2 自分の音階番号を知る Step3 自分のハンドサインを知る Step4 音階をハンドサインで演奏する Step5 合奏する ○ 感想の共有
	後半	○ アングルンを考える ○ 特別支援教育的な考察 ○ 質疑応答
まとめ		○ ワークシートに記入

音楽教育×特別支援の可能性

インドネシアの伝統楽器 アングルン

Vent (以下、V) :アングルンを日本の音楽教育で取り上げようと思われたきっかけを教えてください。

松浦 :学習指導要領の鑑賞領域において、小学校の「諸外国の音楽」、中学校の「アジア地域の諸民族の音楽」への意識が高まっていること、そしてコロナ禍で吹奏楽器による合奏が制限される中、我々に何ができるのかを考えるようになったことがきっかけです。アングルンはインドネシアに起源をもつとされる竹製の打楽器で、手で揺らすことにより1つの楽器からオクターヴに調律された1つの音高を発します。音程は竹の長さや太さによって楽器ごとに異なり、ハンドベルのように複数人で演奏することで音階を形成します。1人の演奏がいつの間にか合奏となって曲が出来上がるという感動を、リコーダーの苦手な子どもや多様性をもつ子どもにも体験させたいと考えました。

鈴木 :私はコロナ禍以前の2018年に、研究の一環として訪れたインドネシアで初めてアングルンと出会いました。アングルンは合奏の際、ハンドサインを用います。私は聴覚障害のある子どもの教育が専門なので、もともと指文字や手話を使用していました。指文字に

はアングルンに用いられるハンドサインと形が同じものがあり、それを音楽の領域でハンドサインとして使えば音楽になります。こうすることで年齢や障害の有無にかかわらず誰でも音楽活動が可能になると考え、実際に取り入れることにしました。

V :アングルンの魅力は何ですか？

松浦 :ハンドサインや合図を覚えてしまえば、楽譜が読めなくても演奏できるところだと思います。子どもは興味・関心の段階を経て「やりたい」という思いをもちます。まずは、その取りかかりの部分をつくるのが大切なと思っています。

鈴木 :アングルンの特徴として、インドネシア語の「簡単」「安い」「大勢」「楽」「教育的」の頭文字を取った「5つのM」が挙げられます。それぞれ、初めてでもすぐに演奏できる、安く手に入る、友達や大人数でできる、気楽にできる、教育的な側面をもつといった意味です。

V :何人から演奏することができますか？

松浦 :曲にもよりますが、少人数から演奏可能です。初心者には難しいかもしれませんが、1人で2~3台のアングルンを持って合奏することもできます。

鈴木 :アングルンの中には木琴のように音階順に並べて、1人で演奏できるものもあるんですよ。

V :反対に人数が多いと、楽器が足りなくなってしまうそうですね。

鈴木 :その解決策として、^{アイアングルン}「iAngklung」というスマートフォンやタブレット端末用の無料アプリがあります。これはスマートフォンからアングルンを擬似的に体験することができるアプリで、楽器



複数のアングルンを演奏するアルディアン先生とアンディカ先生

が足りない場合や飛び入りで合奏に参加するようなシチュエーションでの活用が期待されています。

V :アングルンはインドネシアではメジャーな楽器なのですか？

松浦 :2010年に「インドネシアのアングルン」がユネスコの無形文化遺産に登録されました。これを受けて、現在はインドネシアの硬貨のデザインにアングルンが使われています。また、2022年5月には「アングルンの町バンドン市宣言」という文化保護のための取り組みが行われました。

鈴木 :特別講義では、アングルンは知っていたけれど実物は初めて触ったというインドネシアの留学生がいました。日本でいえば三線や津軽三味線などの伝統楽器に近い感覚をもっている方も多いようです。

誰でも簡単に 演奏することができる魅力

V :アングルンの教育効果はどのようなところにあると思われますか？

松浦 :持ち方と演奏方法、ハンドサインを覚えてしまえば合奏することができますので、演奏の簡便さ、そして集中力の向上という点で教育効果が高いと思います。講義を受けた学生たちも、ハン



インドネシア製のアングルン(右)と岐阜大学美術教育講座の学生及び準瀬大輔准教授制作のアングルン(左)

ドサインに集中して取り組んでいました。

V: ハンドサインは世界共通なのでしょうか？

松浦: 世界共通のサインだと伺っています。

V: では、ハンドサインさえ習得すれば、アンクルンを指導する立場になったときに困らないということですね。

松浦: そうですね。ただ、私は無理にハンドサインを使う必要はないと考えています。

鈴木: 例えば、幼稚園でアンクルンの指導を行った際、園児にはハンドサインを見分けることが難しいだろうということで、「ド」の列、「レ」の列、「ミ」の列……というように分かれて、先生が自分の列に来たら楽器を鳴らすという方法をとりました。それでも、わずか30分足らずで曲が成立しました。ハンドサインを使うのは、その次の段階からでもよいかと私は考えています。特別支援教育を受ける子どもの中には、複雑なことに取り組むことが難しいけれど、楽器を揺らす簡単な動作であれば自信を持ってできるという子どもはたくさんいます。振れば簡単に音が鳴り、「僕の鳴らす音はド」というように各自が明確な役割をもてるのが、アンクルンの教育的魅力の一つです。

V: 「誰でも簡単に演奏することができる」がキーワードですね。

鈴木: ハンドベルはタイミングよく音を



ハンドサインを用いた演奏の様子

鳴らさないとはいけません、アンクルンは楽器を振ればその間は音が鳴り続けますので、演奏が一発勝負にならないという意味でも「気楽にできる」という特徴が生かされます。

V: 特別講義ではハンドサイン以外にも、色や画像をサインとして扱った演奏パターンを実践されていたかと思います。こうした工夫が、アンクルン導入のハードルを低くしているのかなと感じました。特別支援教育で用いられる楽器や教材に必要な条件は何ですか？

鈴木: 障害によって異なると思いますが、ピアノやリコーダーを上手に演奏するには、指先が器用じゃないといけませんよね。そうすると、やはり「簡単」というキーワードが重要になってくるのかなと感じます。

松浦: 子どもたちはできないと諦めちゃうんです。「楽器を振れば音が鳴る」「あっ、これでいいんだ!」というところから始めて、達成感をもってもらう。そういう意味で、取り組みやすさというのは大きなポイントになってくると思います。

V: 音楽の授業が苦手な子どもをいかに引きつけるか、その授業展開を考えることも重要なポイントになりますね。一連の活動を通して、印象に残っている出来事がありますか？

松浦: 初めてアンクルンを手にした子どもたちが、活動を通して「簡単だったよ!」「できたよ!」と得意げに目を輝かせる姿には感動しますね。その度、子どもたちに自信をもたせてあげることの重要性を感じます。

特別支援教育を身近に考える

V: 指導を通して大切にされているポイントはありますか？

松浦: まず、指導する我々がその道のプロに教えを乞うことです。学んだことを講義に取り入れ、最終的に学生たちが現場に生かしてくれればよいと思います。

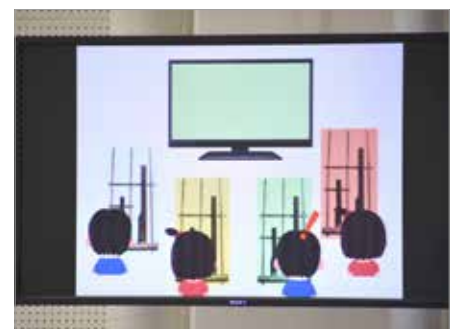
鈴木: 今回私たちは、インドネシア教育大学文化センターのアルディアン・ス



アンクルンで用いられるハンドサイン



ハンドサインの代わりに色を用いたサインの例



自分のサインの色が画面に表示されたときに楽器を鳴らす



特別講義の様子

マルワン先生から指導を受けました。彼は「アングルンの町バンドン市宣言」のプロデュースを手掛けたプロのアングルン奏者です。私はアングルンを通して、多様性をもつ、または障害のある子どもでも参加可能な活動の実現を目指しています。音楽と障害とをつなぐ教科領域を超えた1つのツールとしてアングルンを活用する、そういった点で彼とは考えが合ったのかなと思います。インドネシアは、特別支援教育をとても大切にしている国です。自国の文化が日本の障害のある子どもたちのために役立つのであればと、この取り組みに協力してくださいました。

松浦：最近、教育学部の学生がアングルンサークルの立ち上げに張り切っていて、その折、インドネシアと日本をオンラインでつないでアングルンを合奏したこともあります。吹奏楽やオーケストラサークルとなると学生も身構えてしまいがちですが、アングルンは演奏が容易な点で彼らも取り組みやすかったようです。極端な話ですが、ご年配の方の脳トレにも活用できる楽器だと思います。
V：音楽教育や特別支援教育のみなら

ず、生涯教育にも生かせる楽器という点に魅力を感じます。

鈴木：先日の特別講義は、前半に「アングルンを奏でる」、後半に「アングルンを考える」というテーマで構成しました。前半は実際にアングルンを体験してもらい、後半は他領域や特別支援教育を絡めたアングルンの可能性について考察するといった内容です。自分たちの演奏がいつの間にか合奏となって曲が出来上がるという感動を体験した学生たちは、うまく演奏できない子どもが周りにいたときにどうするのか。「どうしてできないか」を探すのではなく、「どうしたらできるか」を考えさせることを、教員養成という立場から重要視しました。

V：さまざまなバックグラウンドをもつ子どもたちを受け入れることが大切なのですね。

松浦：2022年3月に文部科学省の検討会議より、すべての教員が採用後10年程度の間、特別支援学級の担任などの経験を2年以上積むことが望ましいとする報告書案が示されました。現場に出てから初めて特別支援教育について考えたところで、教員自身が困惑す

るだけです。そういった意味でも、アングルンを講義で活用することによって、学生たちに特別支援教育をより身近に感じてもらうきっかけにしたいと考えています。

V：昨今、日本の特別支援教育が細分化されていることについて、国連からも指摘がありましたね。

松浦：私は実習に行く学生に、「時間があるときに特別支援のクラスを見てきなさい」と伝えています。それは、これから教員になる学生たちが、こうした現場をしっかりと認識しておかなければならないと感じているからです。

みんなで感動を共有できる合奏を目指して

V：アングルン教育の今後の展開についてはどのようにお考えですか？

松浦：多様性のうたわれる現代では、言葉を言葉で説明することにハードルの高さを感じる場面も多々あります。そこで私たちは、アングルンを通して、国や世代、障害の有無を超えた「みんなで感動を共有できる合奏」の機会を



対談の様子

つくりたいと考えています。

鈴木：先ほどアンクルンサークルの話がありましたが、ゆくゆくはサークルに所属する学生たちが、この計画の一翼を担ってくれることも期待しています。これまでの活動を通してアンクルンを授業で実践したいとお声掛けいただいた学校には、アルディアン先生より楽器をプレゼントしていただきました。そもそも楽器が身近ないと、プロのすごさや楽器そのものの魅力に気付くことができないと思うので、今はとにかく楽器に触れていただくための活動を続けています。それから今後の展開としては、2023年に特別支援学校でアンクルン教育を実践する計画を立てています。そこではハンドサインだけでなく、学生たちが考えた色や画像をサインとして用いる取り組みを行う予定です。

松浦：学習指導要領では、子どもたちの主体性が重視されています。子どもたちがサインに合わせるのではなく、子どもたちにサインを合わせていく、つまり我々が「こうしなさい」というばかりではなく、「こうしたい」という子どもたちの思いを尊重することが大切なのです。

V：特別支援における音楽教育の実践例や授業例はこのほか少なく、情報収集に苦勞されているという現場の先生方の声も耳にします。

鈴木：そうした声に対して気軽に質問できる場を大学がつくり、研究や実践論文を通して情報を発信していくことが、私たちの役割でもあると考えています。

松浦：そこは引き続き取り組んでいきたい内容ですね。

V：今後に向けた課題があれば教えてください。

松浦：まだ私たちが中心になって「やろうやろう」と言っている状態なので、これからどのように学生を

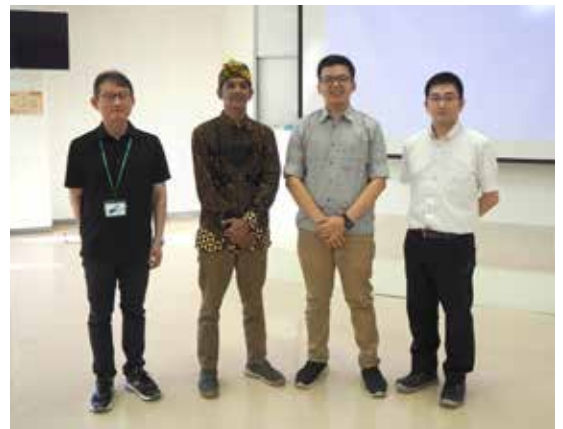
指導していくかが大事ですよ。我々が指導したうえで、「じゃあ、私はこうしたい」というような学生の主体性が出てこない、それで終わってしまうと思います。あとは、現場の先生方に「私たちが授業に取り入れたい！」という気持ちをもっていただいたうえで、実践につなげていくということです。

鈴木：若い先生だと、なかなか自分の思うような教育ができない場合があると思うんです。以前、私の担当する講義に参加された現職の先生方に、インドネシアのアルディアン先生をオンラインでつないで、アンクルンの合奏体験をしていただいたことがあります。その際、先日の特別講義と同様にアンケートをとって、どうしたら授業でアンクルンを使えるか、どんな場面で使いたいかといったヒアリングを行いました。大学は研究機関であるので、

先生方を対象とした調査研究や実践研究も必要だと考えています。

松浦：特別支援教育と音楽教育は、背景や知識はそれぞれ異なりますが、共通点が多く、最終的な着地点が同じ分野です。今後、音楽教育でもこれらの研究がとても重要になってくると思います。

鈴木：岐阜大学でアンクルンを自作した際、制作は美術教育の隼瀬大輔先生、音程を合わせるのには音楽教育の松浦先生、特別支援教育での活用を考えるのは鈴木と、教科や領域を超えて行う活動のおもしろさを実感しました。こうしたおもしろさを共有できる力を秘めたアンクルンをいかに活用していくか、今後の研究に期待していただければ幸いです。



特別講義を担当された先生(左から松浦先生、アルディアン先生、アンディカ先生、鈴木先生)

特別講義の様子を
ご覧いただけます



https://www.kyogei.co.jp/data_room/vent/vol151_jugyosha.html

スマートフォンアプリ
「iAngklung」のダウンロードはこちら



Google Play
<https://play.google.com/store/apps/details?id=com.biminasoft.iAngklung&hl=en&gl=US>



App Store
<https://apps.apple.com/jp/app/iangklung/id401820308>

令和4年度 全日本音楽教育研究会全国大会 山口大会（総合大会）

第53回 中国・四国音楽教育研究大会 山口大会
楽しむっちゃ！音楽
～響きあおう 感動のきずなで～



合同合唱『ふるさとの風』

令和4年11月1日・2日、「全日本音楽教育研究会全国大会 山口大会（総合大会）」が山口市の山口市市民会館、片山学園小郡幼稚園、山口県健康づくりセンター、山口県教育会館、山口県立山口高等学校、KDDI維新ホールで開催されました。公開授業の概要及び、小学校部会と中学校部会の発表を中心にレポートします。

山口市で全国大会開催

秋の爽やかな風の中、全日本音楽教育研究会全国大会が開催されました。新型コロナウイルスの影響により、令和元年度の東京大会以来、中止やオンライン開催（山梨大会）を経て、対面で開催されるのは3年ぶりとなりました。

本大会の会場となった「西の京」山口市には日本三名塔の一つでもある国宝の瑠璃光寺五重塔があり、湯田温泉が有名です。街を歩けば、山口市出身の詩人、中原中也の生家跡地に建てられた中原中也記念館や、郷土料理の飲食店、無料の足湯など、多くの観光スポットがあります。心地よい自然と大内文化（室町時代に山口で花開いた文化）を堪能できるこの場所に、全国から音楽教育に携わる先生方が集まりました。

大会主題「楽しむっちゃ！音楽 ～響きあおう 感動のきずなで～」は、子どもたちが生涯にわたって主体的に音楽

を楽しもうとする姿を願い、学習指導要領に示されている「生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力を育成する」という目標に沿って掲げられたものです。

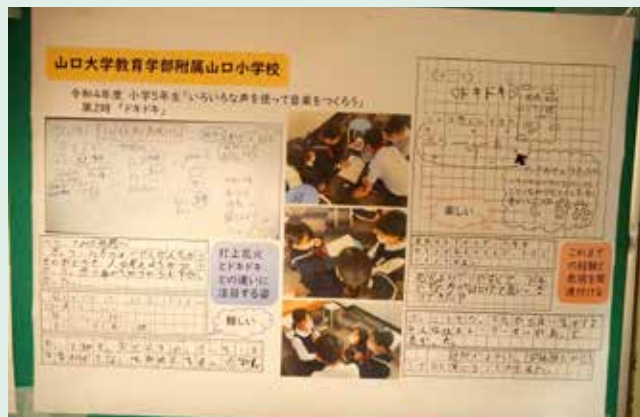
小学校部会（1日目）

11月1日、小学校部会は2つの会場で6つの授業実践が行われました。山口県健康づくりセンターの表現領域の器楽は田中由貴先生（山口市立上郷小学校）、鑑賞領域は吉本弥咲先生（山口市立平川小学校）、表現領域の歌唱は濱本宏先生（宇部市立西岐波小学校）が担当しました。

山口県教育会館での表現領域の音楽づくりは、石田千陽先生（山口大学教育学部附属山口小学校）の「いろいろな声を使って音楽をつくろう」で、草野心平の詩「ゆき」を用いた活動です。今回の授業に入る前、打ち上げ花火や「ドキドキ」といったオノマトペを用いて、情景を即興



石田千陽先生（山口大学教育学部附属山口小学校第5学年）
音楽づくり：いろいろな声を使って音楽をつくろう



事前の授業実践でのワークシート（山口大学教育学部附属山口小学校第5学年）



末廣めぐみ先生（山口市立大内小学校第3学年）
鑑賞：せんりつのおもしろさを味わいながら、きいたり歌ったりしよう『アルルの女』より「かね」「歌おう声高く」

的に表現する活動を段階的に行い、言葉から感じる音のイメージや表現を子どもたちは考えてきていました。本時では、詩の「しん しん しん」という言葉を何度もいろいろな声を使って発声して、そこから得られた「しん」という言葉に対するイメージについて、自由に意見を出し合い、取り組みを進めました。

鑑賞領域は、末廣めぐみ先生（山口市立大内小学校）の「せんりつのおもしろさを味わいながら、きいたり歌ったりしよう『アルルの女』より「かね」「歌おう声高く」」です。子どもたちが曲全体を繰り返し聴いて、その印象をワークシートに書き込んだあと、先生が子どもたちにこの曲のタイトルは「かね」であることを伝えます。子どもたちは鐘の旋律、次に主旋律をそれぞれ聴き取る活動を通して、この曲は2つの旋律でできていることに気付きます。さらに鑑賞の際には鐘の音の部分で先生と一緒に三角形の指揮をするなど、体の動きを通して曲の仕組み

を理解していました。

表現領域の歌唱は、内田弥生先生（山口市立大殿小学校）の「詩と音楽との関わりを味わおう『冬げしき』」です。これまでの授業で習ったことやできるようになったことを振り返り、『冬げしき』をどのように歌いたいかを考えます。1～3番の歌詞を3つのグループに分かれて担当し、拡大楽譜にグループごとにどのように歌いたいかを書き込み、練習を行いました。「胸を開いて歌う」「優しい感じに」など、子どもたちはさまざまな意見を出し合います。最後にステージ上でグループごとに歌を発表し、「視線を決めると心が集まった」「強弱を意識した」など、自分たちの演奏を振り返りました。

中学校部会（1日目）

同日午前、中学校部会が山口市民会館で行われ、表現



鐘の音を探し、手を動かしながら音楽を聴く（山口市立大内小学校第3学年）



内田弥生先生（山口市立大殿小学校第5学年）
歌唱：詩と音楽との関わりを味わおう「冬げしき」



グループごとの発表(山口市立大殿小学校第5学年)



林直幸先生(山口市立小郡中学校第2学年)
創作:音階や音のつながり方の特徴を捉えて創作しよう



タブレット端末に曲を打ち込む(山口市立小郡中学校第2学年)

領域の器楽は原田美穂先生(山口市立大殿中学校)、鑑賞領域は岡本美穂先生(山口市立白石中学校)が担当しました。

表現領域の創作は林直幸先生(山口市立小郡中学校)の「音階や音のつながり方の特徴を捉えて創作しよう」で、ミニキーボードを用いて、イメージとなる画像(桜と川とSLの写真)から受けた印象をもとに旋律を創作する授業です。グループごとに2名が選出され、それぞれのつくった8小節の旋律をタブレット端末アプリ(YAMAHAヴォーカロイド教育版)に打ち込みます。生徒たちはこれまでの授業で学習した、音のつながり方や反復、変化の仕方などを生かして作品を完成させました。グループ発表のあと、互いの作品の特徴やよさをワークシートに記入し、意見を全体で共有しました。

表現領域の歌唱は、實歳純子先生(山口市立鴻南中学校)の「曲の構成を手掛かりに、表現を工夫して歌おう『ぜんぶ』」です。ウォーミングアップとして全員で合唱をしたあとに、グループに分かれて歌いながら試し、よりよい表現方法を考えます。各自でも歌いながら強弱や歌い方

について意見を出し合い、それらをGoogle ジャムボードに入力していきました。グループごとに出された意見を合唱で発表し、本時の学びと振り返りをフォームに入力して提出するという、デジタル端末を活用した歌唱授業でした。

どの授業でも児童、生徒たちは授業に積極的に取り組んでおり、真剣に音楽と向き合う姿が印象的で、コロナ禍にも負けずに子どもたちが先生とともに学習を積み重ねてきたことを感じました。

午後は、ワークショップが5つあり、「わらべうた」(知念直美先生/国際日本コダーイ協会会員)、「歌唱指導」(山崎朋子先生/東京都調布市立第五中学校)、「指揮法」(田久保裕一先生/指揮者・国立音楽大学)、「音楽づくり」(高倉弘光先生/筑波大学附属小学校)、「箏の演奏と講話～いまを生きる箏～」(山野安珠美先生/箏演奏家)と、パネルディスカッション「コロナ禍での音楽教育活動から探る授業改善の展望」が行われました。どれもたいへん充実していて、授業実践や研究に生かせる内容でした。



實歳純子先生（山口市立鴻南中学校第2学年）
歌唱：曲の構成を手掛かりに、表現を工夫して歌おう「ぜんぶ」



ウォーミングアップ（山口市立鴻南中学校第2学年）



『赤とんぼ』を劇で解説



記念講演に登場した宮川彬良さん

全体会（2日目）

2日目は、山口市市民会館での全体会です。指導講評では、志民一成先生と河合紳和先生（文部科学省初等中等教育局 教育課程課 教科調査官）が登壇し、部会それぞれの研究内容について、見解を述べてくださいました。

続く記念講演に登場したのは、作曲家の宮川彬良さんです。全国大会山口大会会長の松田和寛先生から要望があったという「ヒラメキノ瞬間（ひらめきとは何か）」というテーマに沿って、宮川さんは私たちに聴きなじみのある童謡やクラシック音楽について、ピアノ演奏も交えながら考察を行いました。幼い頃、歌詞に衝撃を受けたという『さっちゃん』『大きな古時計』については、「ひらめき」と「命」を感じた瞬間を語り、ベートーヴェンの『運命』については、旋律の音に対して言葉を当てながら曲を分析しました。『赤とんぼ』は歌に沿った情景を劇にして、曲の背景を参加者と共有しました。講演は、宮川さんのユーモアたっぷりな、終始笑いに溢れた盛りだくさんの内容となりました。

記念演奏は、どの学校の発表もすばらしく、演奏の合間に山口県にちなんだ劇も行われるなど、山口の文化により親しめる内容となっていました。合同合唱では、2009年から続く「山口きずな音楽祭」のために宮川彬良さんが書き下ろした『きずな』（作詞：湯川れい子）と、山口市民の作詞による『ふるさとの風』（作曲・編曲：ちひろ）が華やかに披露され、山口大会の幕を下ろしました。

対面開催となった山口大会には多くの参加者が集まり、本研究で追い求めていくとしていた、子どもたちの「音楽的な見方・考え方」を働かせている姿がどの会場にもありました。コロナ禍にも負けずに行われたこれらの実践の様子は、音楽教育に携わる私たちに勇気を与えてくれました。この2日間の発表内容は全国に広がり、子どもたちの明るい未来へとつながっていくものと信じております。

次回、全日本音楽教育研究会全国大会（小・中学校部会大会・高等学校部会大会）は、令和5年10月26日・27日に富山県で開催されます。

（ヴェン編集部）

全日本音楽教育研究会全国大会山口大会（総合大会）各部会の主題と公開授業（保育）の概要をご紹介します。

幼稚園部会 「感じよう 音や音楽を 全身で」
～ 感性と創造性を豊かに発揮する園児の育成 ～

会場 学校法人 片山学園 小郡幼稚園（山のようちえん）
学校法人 片山学園 小郡幼稚園（森のようちえん）

公開保育

領域	年齢	活動名	保育者／指導助言者
表現	年長	わらべうたあそびで楽しもう	片山学園小郡幼稚園 教諭 田坂文那 教諭 片山 遊 山口学芸大学 教授 坂本久美子

小学校部会 「味わおう 音や音楽を 心と身体で」
～ 生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる児童の育成 ～

会場 山口県健康づくりセンター
山口県教育会館

公開授業

領域分野	学年	題材名・教材名等	授業者／指導助言者
表現 器楽	6年	曲想の変化を感じ取って演奏しよう 「風を切って」	山口市立上郷小学校 教諭 田中由貴 宇部市立黒石小学校 校長 原田健一郎
鑑賞	1年	がっきとなかよくなろう 「シンコペーテッド クロック」	山口市立平川小学校 教諭 吉本弥咲 下関市立安岡小学校 教頭 河村直子
表現 歌唱	4年	せんりつのとくちょうを生かして歌おう 「ゆかいに歩けば」	宇部市立西岐波小学校 教諭 濱本 宏 山口大学教育学部 非常勤講師 久保田 尚
表現 音楽づくり	5年	いろいろな声を使って音楽をつくろう	山口大学教育学部附属山口小学校 教諭 石田千陽 山口大学教育学部 教授 高橋雅子
鑑賞	3年	せんりつを重ねるおもしろさを味わいながら、 きいたり歌ったりしよう 『アルルの女』より「かね」「歌おう声高く」	山口市立大内小学校 教諭 末廣めぐみ 山口県教育庁義務教育課 管理主事 門田集二
表現 歌唱	5年	詩と音楽との関わりを味わおう「冬げしき」	山口市立大殿小学校 教諭 内田弥生 山口学芸大学教育学部 教授 河北邦子

中学校部会 「高めよう 音楽表現・音楽文化を」
 ～生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる生徒の育成～

会場 山口市民会館

公開授業

領域分野	学年	題材名・教材名等	授業者／指導助言者
表現 器楽	2年	篠笛特有の音を味わいながら演奏しよう	山口市立大殿中学校 教諭 原田美穂 山口県教育庁義務教育課 指導主事 田村恵美
表現 創作	2年	音階や音のつながり方の特徴を捉えて 創作しよう	山口市立小郡中学校 教諭 林直幸 山口市立小郡中学校 教頭 野上慎二郎
表現 歌唱	2年	曲の構成を手掛かりに、表現を工夫して歌おう 「ぜんぶ」	山口市立鴻南中学校 教諭 實歳純子 萩市立むつみ中学校 教頭 赤間鈴世
鑑賞	3年	構成・旋律が生み出す雰囲気味わって聴こう 組曲「展覧会の絵」	山口市立白石中学校 教諭 岡本美穂 山口市立鴻南中学校 教頭 岩崎知恵子

高等学校部会 「広げよう 音や音楽の世界を」
 ～生活や社会の中の芸術や芸術文化と豊かに関わる生徒の育成～

会場 山口県立山口高等学校

公開授業

領域分野	学年	題材名・教材名等	授業者	指導助言者
鑑賞	1年	愛され続ける クラシック音楽の魅力を味わおう 「交響曲第9番ニ短調」	山口県立山口高等学校 教諭 丸山航	島根大学教育学部 学部長 河添達也 山口県立防府高等学校 佐波分校 教頭 中川聡
表現 器楽	3年	箏の音色を探究し 日本音楽の魅力を再発見しよう 日本古謡『うさぎ』を用いて	中村女子高等学校 教諭 岸美砂子	

大学部会 「生かそう 未来につながる音楽の力を」

会場 KDDI 維新ホール
 (公開授業なし／研究発表のみ)

音楽診断

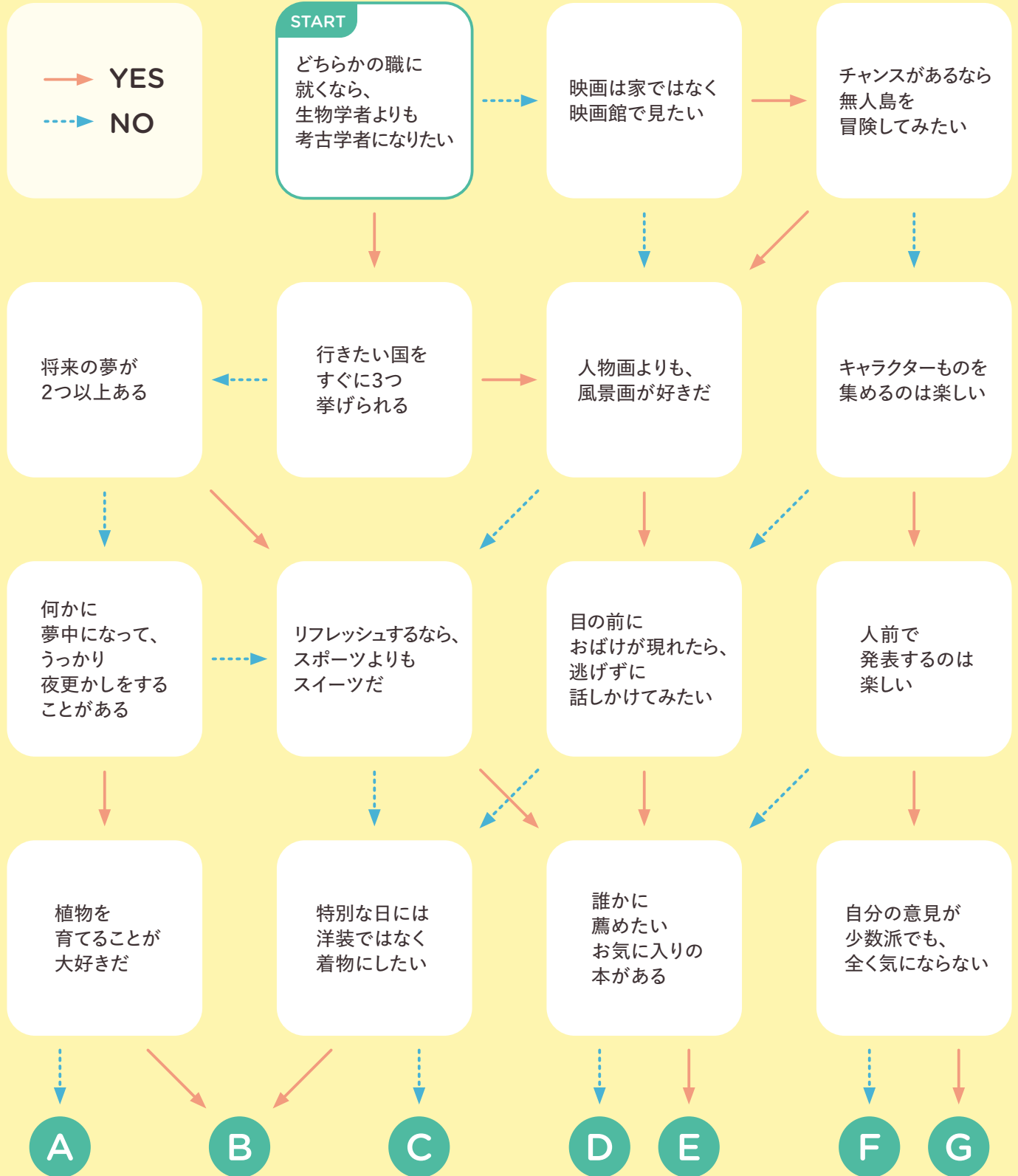
Kyogei Presents

第16回 日本の作曲家編



『ヴァン』オリジナルでお届けする音楽診断企画の第16弾。
日本の作曲家7人の中から、あなたに似ているタイプの作曲家をご紹介します。

監修・解説 = 山田治生 Text = Haruo Yamada



A 前衛的でオリジナリティを発揮
武満徹 (1930~1996)

海外で最も有名な日本人作曲家の一人。音楽学校には通わず、ほとんど独学で作曲を修める。日本に来ていたストラヴィンスキーが武満の初期の作品である『弦楽のためのレクイエム』に触れ、高く評価。1967年にニューヨーク・フィルからの依頼に応じて作曲された、琵琶、尺八とオーケストラのための『ノヴェンバー・ステップス』は、日本の伝統楽器とオーケストラの共演の先駆けとなり、世界中で演奏され続けている。数多くの映画音楽も手掛けた。

武満徹



B 文化や歴史を大切にし、独自の世界観をもつ
伊福部昭 (1914~2006)

北海道出身。身近にいたアイヌの人々から大きな影響を受け、それは後の作品にも生かされる。大学の専門は林学であり、作曲は独学で修めた。代表作には、『交響譚詩』、『シンフォニア・タプカーラ』、ピアノ協奏曲『リトミカ・オスティナータ』などのオーケストラ作品があげられるが、最も広く知られているのは映画『ゴジラ』の音楽。オーケストレーションの大家であり、『管絃楽法』という著書も残している。教育者としては、東京音楽大学の学長を務めた。

伊福部昭



C 明朗なバランス型だが果敢な一面も
芥川也寸志 (1925~1989)

芥川龍之介の三男として生まれた。作曲家として活躍するほか、指揮も手掛ける。日本作曲家協議会委員長や日本音楽著作権協会理事長を務め、テレビ番組 (NHK『音楽の広場』など) の司会者としても人気があった。芥川は、幼い頃より、ストラヴィンスキーの作品に親しみ、学生時代は、伊福部昭に師事。戦後、ソビエト連邦に行き、ショスタコーヴィチにも会った。代表作には『交響三章』、『エローラ交響曲』、オペラ『ヒロシマのオルフェ』などがあげられる。

芥川也寸志



D 天才肌の革新者
滝廉太郎 (1879~1903)

東京音楽学校 (現、東京藝術大学音楽学部) で学んだ後、1901年にドイツのライプツィヒ音楽院へ留学したが、肺結核にかかり、帰国。1903年に23歳の若さで亡くなった (2023年が没後120周年にあたる)。『花』、『荒城の月』、『箱根八里』、『鳩ぽっぽ』、『雪やこんこん』、『お正月』などの歌曲や童謡が知られている。『花』はドイツ留学の前年に歌曲集『四季』の第1曲として出版された。また、1900年に作曲した『メヌエット』は日本人作曲家が書いた初めてのピアノ独奏作品といわれている。

滝廉太郎



E 自分の道を突き進み多彩に活躍
團伊玖磨 (1924~2001)

祖父は三井財閥の総師であった團琢磨。1932年の血盟団事件で祖父が暗殺されたことが、彼を (実業や政治ではなく) 芸術に向かわせたという。木下順二の民話劇を台本とした『夕鶴』は、最も上演回数が多い日本のオペラである。幅広いジャンルの作品を手掛け、オペラは『夕鶴』を含めて7つ、交響曲は6つ残す。歌曲や童謡では『花の街』、『ぞうさん』などが知られている。文筆活動も活発で、エッセイストとして人気を博した。

團伊玖磨



F 俯瞰の視点をもち新しいことを取り入れる先駆者
山田耕筰 (1886~1965)

ベルリン王立アカデミー高等音楽院に学んで、後期ロマン派の影響を受けた。交響曲『かちどきと平和』、交響詩『曼陀羅の華』、オペラ『黒船』などを作曲したほか、『赤とんぼ』、『からたちの花』、『この道』、『鐘が鳴ります』、『ペチカ』、『待ちぼうけ』など、歌曲や童謡にも数多くの名作を残した。指揮者としては、ベルリン・フィルを指揮し、ニューヨークのカーネギーホールでの舞台にも立つなど国際的に活躍。洋楽関係者としては初の文化勲章を1956年に受章。

山田耕筰



G エネルギーあふれるマルチな才能をもつ
山本直純 (1932~2002)

齋藤秀雄に指揮を学ぶ。新日本フィルハーモニー交響楽団の創立に際し中心的な役割を果たす。テレビ番組『オーケストラがやって来た』では、司会、指揮、構成などを担って、クラシック音楽の大衆化にも尽くした。紅いタキシードが指揮者としてのトレードマーク。作曲家としては、映画『男はつらいよ』の音楽、テレビ番組『8時だヨ! 全員集合』の音楽、チョコレートのCM (『大きいことはいいことだ』) などで大衆的な人気を博したが、オーケストラ曲などクラシック音楽の作品も残している。

山本直純



山田治生 (音楽評論家)

1964年、京都市生まれ。1987年、慶應義塾大学経済学部卒業。著書に『トスカニーニ 大指揮者の生涯とその時代』、小澤征爾の評伝である『音楽の旅人 ある日本人指揮者の軌跡』、『いまどきのクラシック音楽の楽しみ方』 (以上、アルファベータ)、編著書に『戦後のオペラ』 (新国立劇場運営財団情報センター)、訳書に『レナード・バーンスタイン ザ・ラスト・ロング・インタビュー』 (アルファベータ) などがある。



研究大会

10月

October

26日(木)・27日(金)

令和5年度 全日本音楽教育研究会全国大会
(小・中学校部会大会・高等学校部会大会)
富山大会

第18回東海北陸小中学校音楽教育研究大会
富山大会

富山市芸術文化ホール(オーバード・ホール) 他

〈大会主題〉

つなぐ 深める ひびき合う ～豊かな音楽の学び～

[問い合わせ]

富山市立光陽小学校 教頭 土井和哉
〒939-8211 富山市二口町1-4-1
TEL 076-425-2277 / FAX 076-425-1700
doi-kazuya@toyama-city.ed.jp

11月

November

10日(金)

第65回北海道音楽教育研究大会 函館大会
第49回道南音楽教育研究大会

函館市民会館 他

〈全道共通主題〉

音楽のよさを分かち合い 確かな力を育む音楽教育

〈函館大会主題(仮)〉

音楽でつながり ひろがる 心と学び
～なるほど それもいいね!～

[問い合わせ]

第65回北海道音楽教育研究大会函館大会準備委員会事務局
函館市立千代田小学校 教諭 立野恭子
〒040-0015 函館市梁川町23-4
TEL 0138-52-2518 / FAX 0138-52-2517
tateno@hakodate-hkd.ed.jp

17日(金)

第65回関東甲信越音楽教育研究会 長野大会
第72回長野県音楽教育研究大会

ホクト文化ホール(長野県県民文化会館) 他

〈大会主題〉

発見! 音楽のオモシロさ!

～音楽科における個別最適な学びと協働的な学びを通して～

※大会案内は随時こちらでご確認いただけます。

<http://www.nagano-ongaku.sakura.ne.jp>
(長野県音楽学会 公式HP)

[問い合わせ]

長野市立若槻小学校 長谷部直子
〒381-0084 長野市大字若槻東条810
TEL 026-295-6969 / FAX 026-295-6948



教育芸術社ホームページでは、
この他の研究大会やイベントなどの
情報も掲載しています。

https://www.kyogei.co.jp/data_room/event/

17日(金)

第54回中国・四国音楽教育研究大会 愛媛大会
松山市民会館大ホール 他

〈大会主題〉

伝え合おう 響き合おう 未来へつながる わたしの音楽

[問い合わせ]

事務局

松山市立三津浜小学校 教頭 和田和美

〒791-8051 松山市梅田町2-42

TEL 089-951-0804 / FAX 089-951-4969

21日(火) 22日(水)

第64回九州音楽教育研究大会 鹿児島大会
第61回鹿児島県音楽教育研究大会

宝山ホール 他

〈大会主題〉

あそぶ たのしむ ひらく そして生きる

[問い合わせ]

実行委員会 事務局

さつま町立宮之城中学校 教諭 宮永智洋

〒895-1803 薩摩郡さつま町宮之城屋地391

TEL 0996-53-0855 / FAX 0996-53-0856

mtmajormvtpjjhs@yahoo.co.jp

— 新作合唱曲による公開講座 —

Spring Seminar

2023

新作合唱曲による公開講座「スプリングセミナー」は、2023年で10回目を迎えます。

この節目を記念して、「スプリングセミナー 2023～10周年記念スペシャルコンサート」を開催いたします。当日はステージに作曲家が登場します。ぜひご来場ください。

※詳細や最新情報は弊社ウェブサイト等でご確認ください。

- 日 程：3月28日(火)
- 会 場：東京音楽大学TCMホール
(中目黒・代官山キャンパス)
- 内 容：動画配信で開催したスプリングセミナー 2021・2022の全12曲をコンサート形式のセミナーとしてお届けします。
- 司 会：藤原規生
- 作曲家：[同声] アベタカヒロ、大熊崇子、
信長貴富、横山裕美子
[女声] 土田豊貴、横山潤子、
山下祐加、大田桜子
[混声] 三宅悠太、木下牧子、
なかにしあかね
- 合唱団：八千代少年少女合唱団
(指揮：長岡亜里奈)
女声合唱団 おうたや
(指揮：田中エミ)
TCM スペシャルコーラス
(指揮：松井慶太)
- お問い合わせ：
株式会社教育芸術社
スプリングセミナー実行委員会
TEL 03-3957-1168
FAX 03-3957-1740
<https://www.kyogei.co.jp/spring-seminar/>



最新情報は弊社ウェブサイト
随時公開いたします。
<https://www.kyogei.co.jp/spring-seminar>



内容は予告なしに変更となる場合がございます。
最新情報は、スプリングセミナーの
Facebookでも発信いたします。
<https://fb.me/kgspringseminar/>

編集後記

「マスクをしていても、笑顔なのが分かりました」——全日本音楽教育研究会全国大会(総合大会)山口大会の研究授業の中で、他のグループの発表を聞いた児童の言葉です。誰かに伝えたいという思いや表現は、コロナ禍という逆境にも負けることはないのだと感じた瞬間でした。本大会では音楽に真剣に向き合う子どもたちと、熱心に研究に取り組んでいらっしゃる先生方の姿が印象的で、取材に訪れた私たちにとっても、充実した2日間となりました。

今号の巻頭はテレビ番組『笑点』でもおなじみ、落語家の春風亭昇太さんのお話を、聞き手にトロンボーン奏者の池田雅明さんを迎えてお届けします。面識のあるお2人だからこそその話題もあり、終始笑いの絶えないインタビューとなりました。

お忙しい中、取材や執筆、編集にご協力を賜りました全ての方に、心より厚く御礼申し上げます。今後ともご支援くださいますようお願い申し上げます。

表紙・巻頭イラストレーション
たかなかな

巻頭インタビュー写真撮影
島崎信一 (STUDIO S+PLUS)

写真提供
藤原道山

イラストレーション
小澤一雄

表紙デザイン・本文組版
STORK

音楽教育 ヴァン



発行者 株式会社 教育芸術社
(代表者 市川かおり)
〒171-0051 東京都豊島区長崎1-12-14
TEL. 03-3957-1175 (代)
FAX. 03-3957-1174
https://www.kyogei.co.jp/
©2023 by KYOGEI Music Publishers. ©-23
本書を無断で複製・複製することは著作権法で禁じられています。

*ヴァン=“vent”はフランス語で「風」。
新しい音楽教育の地平を切り開いていく
願いを込めています。



Recommend

小学校 学校行事・授業のための新教材集

ハッピーソング

- 斉唱3曲、二部合唱7曲、器楽合奏3曲の全13曲を収録。授業や音楽会に最適な小学校向けの新しい教材集、待望のシリーズ第3弾!
- 収録曲:【低・中学年】はなびらけチャップ/ハッピーソング/あじさい【中・高学年】あくびをしようよ/星とたんぼぼ/君は虹を見たかい?/鉄腕アトム【高学年】ペガサス/いつかめぐりあうよ/夕焼けの心/リレーランナー/サンバデジャネイロ/銀河鉄道999
- 定価880円(本体800円+税10%) / B5判 / 56ページ ●ISBN978-4-87788-979-1

準拠CD(別売り)

- 曲集に準拠した全13曲の範唱・範奏音源の他に、器楽合奏3曲のカラピアノ音源が収録されています。
- 1枚 価格1,980円(本体1,800円+税10%) ●GES-15977
- 歌唱曲のカラピアノ音源は、音源配信サイトからのダウンロードによりご購入いただけます。

中学生のための新しい教材集

天球図

- 新作のアカペラ、混声二部、三部の合唱曲や、手拍子が主役の作品、ボディパーカッション、机を楽器に見立てたりズムアンサンブル、小編成の合奏曲など、さまざまな演奏形態の作品を掲載しています。
- 収録曲:前に/瞳をとじて見えるもの/天球図/14-fourteen-/懐かしい未来/Bodipa Beats Z / Desk Drumming -part 1-/ Desk Drumming -part 2-/ クラッピン グラブソディ第4番/Brave Departure / We Are Confidence Man
- 定価880円(本体800円+税10%) / B5判 / 56ページ ●ISBN978-4-87788-990-6

準拠CD(別売り)

- 1枚 価格1,980円(本体1,800円+税10%) ●GES-15978

混声合唱とピアノのための

子どもたちの遺言

作詞: 谷川俊太郎 / 作曲: 名田綾子

- 「幸せ」「走る」「もどかしい自分」「ありがとう」の4曲により構成された合唱組曲です。作曲者の楽曲解説付き。
- 定価1,980円(本体1,800円+税10%) / A4変型判 / 48ページ ●ISBN978-4-86779-001-4

和楽器を活用した合唱・合奏曲集

百花繚乱 小中学校の授業・発表会ですぐに使える!

作編曲・解説: 山内雅子

- 著者の30年以上にわたる現場での実践から生まれた、音楽科の学習に和楽器を無理なく取り入れ、活用するためのアイデアが満載の1冊です。全曲二次元コード付き!(2023年1月発売予定)
- 定価1,980円(本体1,800円+税10%) / B5判 / 88ページ ●ISBN978-4-87788-992-0

学習者用デジタルコンテンツ 小学生の音楽1~6

- GIGAスクールに対応! Chromebook、iPad、Windowsで使用できる! 音楽でICTの活用ができる、教科書に対応したデジタルコンテンツ集!
- 提供方法: クラウド配信
- 「学習者用デジタル教科書」+「学習者用デジタルコンテンツ」セット
1ライセンス 各学年価格1,540円(本体1,400円+税10%) ※1人1ライセンス
- 学習者用デジタルコンテンツ [スクールパック 1年間版]
(使用期間は年度末までです)
各学年価格11,000円(本体10,000円+税10%)

学習者用デジタルコンテンツ 中学生の音楽1/2・3上/2・3下

学習者用デジタルコンテンツ・映像資料 中学生の器楽

- 「創作」の教材を中心に生徒1人1台のタブレット端末で利用できます。
- 提供方法: クラウド配信
- 「学習者用デジタル教科書」+「学習者用デジタルコンテンツ」セット
1ライセンス 各巻価格1,540円(本体1,400円+税10%) ※1人1ライセンス
- 学習者用デジタルコンテンツ [スクールパック 教科書使用期間版]
各巻価格20,900円(本体19,000円+税10%)
※上記価格は2023年3月出荷分より適用されます。
- 学習者用デジタルコンテンツ [スクールパック 1年間版]
(使用期間は年度末までです)
各巻価格11,000円(本体10,000円+税10%)

